

特別活動部会

県研究主題

「望ましい集団活動を通して、生徒一人ひとりの自主的、実践的な態度の育成と豊かな人間関係を育む指導の充実と、評価の工夫・改善」

提案 1

提案者 藤田 和也（川崎地区）

〈研究主題〉

「自主的・実践的な態度を育て、よりよい人間関係を形成する特別活動」
～学校生活の充実・向上を図るための資質・能力の育成～

1 提案内容

（1）主題設定の理由

平成22年度以前の生徒の実態として、集中や落ち着きはみられるものの、基本的な生活習慣が身につけていない、他人の話や考えを受け入れることができていない、人間関係をうまく築けない、仲間のために努力・尽力する姿勢が足りない、などがあげられた。そこで「人間関係づくり」「自主的・実践的な態度」の能力を育てることに重点を置き、研究主題が設定された。

（2）めざす生徒像の設定

研究主題をふまえ、生徒・教職員のアンケート回答の分析から、仲間として認め合える（聴くことができる）生徒、仲間のために自ら進んで協力できる（周囲のことにも目が行き届く）生徒、「話合い」で物事を決定することができ、決定したことに協力して行動できる生徒、の3点を「めざす生徒像」とした。

（3）「めざす生徒像」実現のための具体的な実践内容

話合い活動に重点を置き、学級活動・生徒会活動・学校行事において、学級組織づくりや委員会活動・行事への取り組みで話合いの場面を設定し、話合い方法や記録用紙等に統一性を持たせて学校全体の取り組みを意識づけたり、生徒の意識に注目して反省用紙の設問を工夫したりした。

ア 各生徒に役割がある学級組織づくり

イ 自分たちで活動を行っていける組織作りと活動機会の設定

ウ 「話合い活動」が円滑に展開できる環境づくり

を目標として、学級内での議長団の組織を作ったり、プログラム委員会と呼ばれる、クラスの問題点解決や、行事の企画・検討のための話合いの場を設定したりした。

②生徒会活動

委員会活動の活性化のため、共通の記録用紙を用いて、記録→提出・まとめ→代表委員会の報告という流れを設定した。また、活動が全校生徒にわかるよう連絡黒板を設置したり、連絡の機会を設けるために月1回程度の生徒集会を開催したりしている。体育祭のブロック抽選は好評である。これは縦割りの活動を意識した実践でもある。

③学校行事

努力を認め合い、よりよい人間関係を築く場面設定を意識して行った。反省の用紙の形式を統一し、話し合いに対する生徒の意識に注目した設問を設けた。

④教師の意識

教師も、「めざす生徒像」を求める姿勢や態度を生徒に伝え、教師自ら実行することが大切である、という意識を持った。

(4) 学級活動における話し合い活動について

①学校全体の実践とするために、全クラス共通の事項としたもの。

ア 話し合いのルール決定と徹底（年度当初に全生徒に提示する「学校生活の手引き」の中で確認・指導）

イ 話し合いの形態決定と定着（議長団・学級担任の配置を共通事項とした）

ウ プログラム委員会の実施

エ 板書の方法・項目（何が話し合われているかがわかるように）

②全体で共通せず、生徒の実態に合わせてクラス裁量としたもの

ア 話し合い活動の形態（コの字型・半円型等）

イ ワークシートの形式

ウ 具体的な板書内容、視聴覚機材の活用

エ 発問内容や話し合いテーマの提示方法・題材

(5) 研究成果と今後の課題

①成果

ア 生徒に「聴く」姿勢ができ、聴き・話すことに対する意識が向上した。話し合うことで問題意識を共有することで安心感が生まれ、よりよい人間関係を築く意識が高まった。生徒からは「話し合う意味があった」「全員の意見を知ることができた」「多くの意見を聞き、視野が広がった」等の意見が出された。

イ 教職員の、学級活動に対する意識が高まった。

ウ プログラム委員会が定着し、必要性・重要性が認識された。

②課題

ア よりいっそう、実践を積み重ねていく必要がある。意見を聞いてすぐ自分の意見を述べる力も必要。

イ 生徒が自ら、課題解決のために話し合い活動を求める姿勢を育てたい。話し合い活動の下地・土台ができてきたと思われる。より一層本校の特別活動を発展させ、生徒の能力が高まるよう励んでいきたい。

2 協議内容

質疑

問 学級活動の隊形について。学級裁量とのことだが、進級後にそれぞれ違う経験から意見が交わされ、発展することがあるか。

答 教職員の情報交換から時と場合に応じて試行している。新クラスの実態をみながら新しい形が決まってくる。

問 話し合い活動の時間設定はどの程度か。担任の議長団に対する指導や打ち合わせはどの程度行われるか。

答 担任と議長団はプログラム委員会で打合わせる。時間設定については、大きな行事の前の「成功させるために」というテーマはやりやすい。また、年間計画の中の学年・学級裁量の時間をあてることがある。

問 実践的な態度を育てるとあるが、話し合い活動を通してどのような資質・能力が向上したか。川崎市の共生について、学活と道徳・総合の枠組みについて。

答 話を聴けて、話し合いに参加できる力が高まった。団結する・一つのことに向かう時にことを通して他人を気遣う力が高まった。川崎市では共生共育プログラムとして、人間関係構築に関する授業を年間6時間ほど実践している。本校では一部道徳の時間を用いて行っている。総合・道徳との枠組みは、明確な区切りはないが、ルール作り等は学活で行い、知識・実践は総合で行う。

協議

- ・年度当初に話し合いを取り入れるが、継続しないと定着しない。継続のほか工夫していることはあるか。
- ・話し合いのルールを教室内に掲示したり、道徳や教科の授業の中で指導の機会を設けるなど実践を重ね、続けている（発表者）。
- ・小学校での話し合い指導はいろいろな場面で中学校でも使えると思う。小学校の指導が中学校で生きるとよい。小学校ではどのくらい指導されているのか。
- ・本校の場合、小学校1年生でも話し合いができています。小中でよいところを取り入れるためにも交流が必要だと考える（発表者）。

3 まとめ

本校の学区は古くからの住民と、工業化の時期に移り住んだ人々、工場跡地等に建てられたマンション等に住む新しい住民との3層があり、人口増加率も高い。生徒の実態把握としては、学習は一生懸命やるが生活習慣には留意しない、他人に協力しない、人間関係をうまく作れない等、利己的・無責任な傾向もみられるため、本校のテーマ設定もうなずける。本校の実践により、人の話を聴く、話し合いで解決する、決めたことに協力できる、という力がついてきていることがアンケート結果からもわかるが、学年によって差があるようだが、先生方の実践により、生徒に望む力がついてきているようだ。

教職員の実践について、プログラム委員会や定期的な話し合いの機会の設定によって定着していることが分かった。用紙の統一等は生徒に同一感を与えている。また、教職員が自分の実践を振り返りフィードバックしている姿勢がよい。

4月当初に話し合いのルールを決めること、担任裁量の枠を作りつつ、教職員が情報交換し、話し合いを重ねていることが効果的である。

話を聴けない・話し合いが成り立たないこともあったそうだが、その時期を乗り越えないと力がかからない。時間がかかるが教職員と生徒がそれらを乗り越え、話す側・聴く側が信頼し合っている姿が見える。これからも成果を踏まえ、力を伸ばしていきたい。発言によって安心感が生まれ、よい人間関係を築き、課題を話し合って解決し、よりよい生活をする意欲につながっていく。これらが自発的にできるような学校づくりをしていきたい。

〈研究主題〉

「望ましい集団活動を通して、豊かな人間関係をはぐくむ指導の充実」
～地域との絆を深める修学旅行を通して～

1 提案内容

(1) 大和中学校の概要

修学旅行の行き先は「美浜」。1年生で知らされているが、生徒は美浜を知らず、イメージが浮かばない。

(2) 生徒の実態

人間関係が希薄な感じで、表面上の人間関係を築く。

(3) 研究の構想図

(4) 修学旅行を通して目指す生徒の姿

修学旅行の取り組みや体験活動を通して、人と関わることよき気づくことができる→豊かな人間関係を構築する生徒。

(5) テーマ設定の理由

(6) 平成 23 年度 特別活動 全体計画

(7) 指導計画と評価方法

①評価の観点と評価規準

②修学旅行のねらい

③指導計画

④言語活動の充実について

ア 修学旅行のスローガンや決まり・班編成などについての話し合い

イ 事前の民宿の方とのやり取り

ウ 体験活動を振り返り、そこから学んだことを記述する

エ 体験したことや調べたことをまとめ、発表し合う

オ 生徒自身の変容を見るためのアンケート

(8) 修学旅行の取り組みの実践

①年度当初の全体像

②事前の取り組み

ア 修学旅行では初日と二日目に全 3 回の体験プログラムを計画

イ 3 日間の民宿の方々とのふれあいについて

ウ 学年レク→絆祭りについて

③当日の取り組み

ア 体験プログラム

美浜のインストラクターの方が修学旅行に慣れていてスムーズ。

イ 民宿の方々とのふれあい

ウ 絆祭り

美浜町の方々も参加した大イベントとなった。

④事後の取り組み

ア 修学旅行直後

民宿、インストラクターへのお礼の手紙。

イ 継続した取り組み

(9) 評価と研究の成果および今後の課題

- ①生徒の感想
- ②生徒のアンケートより
- ③語活動の充実
- ④評価と研究の成果
- ⑤今後の課題

(10) その後の美浜との絆

2 協議内容

修学旅行への取り組みの工夫

(1) 暮らし方、働き方、考え方などといった点で進路指導へ活かせるのではないかと。

特に活かしていないが、生徒の一人が福井県の方へ進学し、将来の夢の選択肢が広がったのではないかと感じている。

(2) 「絆祭り」の持ち方

地域の方とのふれあいの中で子どもたちの発想で出たボートの競争やコーラ、綱引きといった意見をすりよせていった。

(3) 下級生への影響と今年度も修学旅行先は美浜なのか。

3年生から修学旅行が良かったことを下級生に話している。今年度も美浜へ行くが、田植えの時期には難しい。修学旅行連合体を外すと田植えの時期に合わせられる。

(4) 事後、美浜とのつながり、生徒の関わり

「生徒会の取り組み」は計画段階では生徒に出さず、交渉OKになったら下ろす。

3 まとめ

(1) 特別活動の目標に関わる、学校行事として人間関係、よりよい生活、言語活動

人間関係が希薄なので人間関係を構築するといった、例年の流れでなく学校の実状に合わせて実践。さまざまな活動が事後に活かしている。

(2) 生徒を観察、生徒の感想が評価

書くことを中心とした言語活動も必要、映像をDVD等にして評価を返すことも考えられる。

(3) 特活と総合が混ざり合ってしまう。それぞれねらいが違うので、フルーツの盛り合わせのように分け隔てをしてほしい。